

追悼 新倉俊一先生

久米あつみ

私たちの敬愛する新倉先生は、2002年3月7日午後7時、石神井のご自宅で亡くなられた。2000年5月に骨髄性白血病という重い病が発見されてから、2年足らずのことであった。5月末虎ノ門病院に入院以来、何回にも亘る辛い処置・治療を受けて同年12月には寛解、退院し、大学への復帰も可能かと思われたが、ご自身の決断で2001年3月31日、帝京大学を辞任された。そのとき頂いた2001年2月5日付けのFaxを、今もって涙なしに読むことができない。(同文の封書が呉教授、大和教授にも届けられたはずである)。

「(前略) 復帰に備えて、絶えず激励してくださり、また超過勤務までして支えてくださったご厚意を思うと、まことに申し訳ないのですが、積年の疲労が一挙に出たせいでしょうか、教師業を続ける気力がなくなりました。もとより敗戦世代ですから、気力を奮い起こすこと自体は不可能ではありますまいが、ノルマに加えて、卒論指導および大学院授業とやらの実務負担増を考えると、肉体的にはやはり無理だと考えざるを得ません。目下は完全寛解状態だとはいえ、所詮これは完治することのない究極の病ですから、先の保証はありません。かけがえのない伴侶のために、やり残した仕事のために、限られた余生を過ごしたいと、真剣にそう念じています。これはまた子供たちの強い希望でもあります。(後略)」

私たちは学科長としての、よき教師としての新倉先生の辞任を心から惜しみながらも、お仕事とご家族への先生の愛をこよなく尊いものと思

い、惜別のひとときをもったのである。だが4月に襲った病再発の重荷は初回よりも重かった。最愛の朗子夫人やお子様方の看護と最新の治療もむなしく病は進行したが、最期はご希望通りご自宅で悠々と迎えられた。亡くなる数時間前、呼吸がいったん停止したが、特愛のワインを口に含ませると、馥郁たる香りに包まれるのと同時に呼吸が戻り、お顔もパッと紅に彩られた、というエピソードは、いかにも新倉先生らしい。

病床でつづけられた翻訳のお仕事も中断されたが、この上ない後継者(娘婿にあたる松村剛氏)によって引き継がれ、まもなく上梓の運びとうかがっている。

新倉先生のご経歴はまことに絢爛たるものである。東京大学教養学科フランス科を経て同大学院人文科学研究科仏語仏文学修士課程、同博士課程を了えてから二度のフランス留学をされ、立教大学、東京大学で教鞭をとり、1980年から82年まではパリ国際大学都市日本館館長を勤められている。日本フランス語フランス文学会の渉外委員長をされたり、「東京の夏」音楽祭の企画構成責任者となられたこともあったし、留学生試験選考委員や日仏会館理事・評議員を勤められるなど、広範なお仕事を精力的にこなしておられた。ご専門の中世に関する著書は『ヨーロッパ中世人の世界』(筑摩書房、1983年)、『フランス中世断章』(岩波書店、1993年)、『中世を旅する』(白水社、1999年)ほかがあり、共著、翻訳も多いが、重要な共同作業の成果として『スタンダード和仏辞典』(大修館、1960年)、『事典・現代のフランス』(大修館、1977年)などの執筆・編集がある。執筆者たちのうらやましいほど緊密な協同的営為を、稲生永氏は「カマラドリー」と呼んでいる(『現代文学』65号、2002年7月新倉俊一追悼号)。これらの業績に対して1985年にはフランス政府からOfficier des Palmes Académiques(教育文化功労賞)を叙勲され、また1971年度と1976年度の毎日出版文化賞、1992年度翻訳出版文化賞を受賞しておられる。

中世フランス文学に関する先生のお仕事については、もっとじっくりした論考が必要となろう。私はただ、その著書を読みつつ感じたことの

一端を記すにとどめよう。

そのひとつは、どの文章を読んでもテキストの読みが正確・かつ立体的で、読む者に時代や社会の流れの中でのテキストの姿をまざまざと刻み付ける文章力と考証力である。思えば先生が中世に惹かれたのは駒場のフランス科における渡辺一夫先生の授業で、奇蹟譚『アミとアミルの友情』が取り上げられたことによる、と著書『中世を旅する』にある。同時期筆者も本郷の仏文科でこの物語の講読授業を、渡邊義愛や大江健三郎らと共に受けていた。大学院では先生と同期になり、『ポンチュール伯の息女』や『パトラン先生』を机を並べて勉強する光栄に浴した。

渡辺一夫先生の授業は、テキストの徹底した読み、に尽きた。テキストに対する、ひいては学生を含めた研究者仲間に対する渡辺先生の謙虚さに、私たちは打たれ、それをこそ学ぼうとした。新倉先生はそのままよき継承者のひとりであったと思う。

中世のものを読み解くとき必要とされるのは語学力だけではないだろう。時代背景や社会史、文学史といった流れのなかで読み取って行く総合的な知力、また想像力が要求される。新倉先生の文章で感心させられるのは、そうした流れというものが、ちっとも「勉強しましたよ」というような気張りなしに、ごく自然に、いふなれば一種の軽みをもって感じられることだった。とくにキリスト教との関係は、日本という異教国の中でしばしば読み違いや不勉強の研究書がみられるが、新倉先生の著書ではそうした違和感を覚えたことがない。これは新倉先生が少年期かなり深くキリスト教とかかわっておられたこととも無縁ではなからうが、聖書の読解をはじめ、猛烈な、しかしひそやかな勉強が陰にはあったと信じるのである。

帝京大学とのかかわりを持たれたのは1989年からのことで、前年設立された国際文化学科は、新倉教授の東京大学退官後の就任が設立認可条件の一つであった。そこで新設2年目の本学科に、まずは非常勤として来られたのである。迷路のような八王子校舎の中で迷い、途方にくれ

た様子で学生食堂の入口に佇んでおられた姿を今も思い出す。諸事戸惑いが多かったことと察せられるが、国際文化学会にも当初から出席され、辛口の批評で聞こえた先生にはめずらしく「なかなかいい」と評価して、以後毎年出席された。いよいよ専任として来られる前には、幻想をもたないようにと筆者が職場のあらゆる難点をレクチャーして、「それでも来ますか」と念を押ししたものである。国立大学から来た先生にはさぞかし不便や不満が多くあっただろうが、一種の諦念をもって潔く行動された。教える内容ばかりではない、あのダンディな容姿と語り口は、多くの学生にとって教場そのものを魅力ある場としたのである。ただ、めぐりあわせとはいえ学科長の重荷を負わなければならなかったのはお気の毒であった。

学科長として新倉先生が働かれたのは、国際文化学科のもっとも厳しい情勢の時期だった。ずいぶんと骨を折って交渉されたところがほとんど実らず、深い徒労感に襲われている様子は、脇で見ていても痛々しかった。わけても先生を苦しめたのは多数の国際文化学科の同僚を移籍という処置に委ねなければならなかったことで、この時の心労が病の引き金になったのではないか、と思われて仕方がない。しかし結果はどうあれ、先生は全力を尽くして、誠実に闘われた。学校行政という、研究者からは疎んじられがちな仕事に対する義務感は徹底していた。それだけに会議や大事な会合への出席、教員としての義務を果たすことについては自他共に厳しかった。遺言のように言われた、「卒論の指導は各自少なくとも学生1名はもってほしい」という伝言はこうした先生の姿勢から出たものである。学生への指導は厳しかったがどの学生も喜んで先生に従ったし、心からの敬愛を捧げていた。ヨーロッパコース、フランス専攻の卒論の審査ははじめのうちフランス関係の4人の教員でしていたが、専攻もなくなり教員数も減った最後の2年ほどは、筆者と新倉先生の二人で口頭試問形式の審査を行なった。新倉先生が読んでくださった卒論(つまり教員2人分となる)は、付箋が右左無数に貼り付けてあり、そこには下線、バツ印などのほかに寸評が日本語、ときにはフランス語で書き

こまれていた。たとえば右側の付箋が「よい」と評価された箇所であると、左側のちがう色の付箋は「要再考」もしくは「ダメ、書き直し」の意であった。イタリアワインを扱った論文が出たとき（この種の論文で一番面白かったと評してくださったが）、むすびの言葉として「イタリアワインがフランスのそれを超える日が来るのを望みつつ」というような意味の文言の右に「ムリデス」と書き込んであったのも思い出に残る。一度審査の際にあまり厳しく論評されて涙を流した学生があった。殆ど完膚なきまでの酷評であったが、その学生はめげずに大学院に進んで勉強をつづけた。研究をつづけようとする学生への励ましであることは、当人にも傍で聞いている者たちにもよくわかったのである。

先生は最後のお仕事となった大学院設置を認可までは見届けられたが、実際に指導には当たることなく退かれた。3月のお葬儀の際には院生を含む旧教え子たちが10数人集まり、裏方の仕事を手伝った。お通夜の席で向こうの机には東大の教え子たちが、こちらの机には帝京の教員と卒業生たちが座り、どちらからも聞こえてくるのが「バーカっていわれたな」という声であった。「バーカ」という叱り言葉にどれほどの愛情が込められていたか、その場にいた者たちは嘸みしめるような思いでこの言葉を繰り返したのであった。